様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年６月２１日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2008～2010
課題番号：20330140
研究課題名（和文）　子どもにおける食発達の総合的研究：養育者との葛藤・調整に注目して

研究課題名（英文）　Different aspects of development in children's eating: with a special attention to caregiver-child conflict and negotiation

研究代表者
根ケ山　光一（ NEGAYAMA　KOICHI ）
早稲田大学・人間科学学術院・教授
研究者番号：00112003

研究成果の概要（和文）：　哺乳･離乳･固形食摂取の発達に関連して，養育者と子どもとの葛藤や調整の問題を中心に質問紙調査（インターネット調査を含む）･行動観察・インタビュー等を行い，総合的に考察した。その結果，子どもの食が彼らの能動性の反映であり，親と子がそれぞれの主体性を示し合う場となり，それが葛藤と調整を生んでいること，そこには時代的変遷が反映されることなどが示された。

研究成果の概要（英文）：Development of breast-/bottle feeding, weaning, and solid-feeding were studied with questionnaire, interviewing, and observation with a special attention to parent-child conflict and negotiation. The results showed that children's eating is a sign of their active participation which brings mutual assertions of care-givers and children resulting in conflict and negotiation. A trend of the times was reflected in it.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	7,600,000	2,280,000	9,880,000
2009 年度	4,700,000	1,410,000	6,110,000
2010 年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
年度			
年度			
総　計	16,000,000	4,800,000	20,800,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・教育心理学
キーワード：食発達，親子の葛藤・調整，哺乳・離乳，発達，世代間比較，保育

１．１研究開始当初の背景

本研究は，代表者の長年にわたる離乳･食発達や母子の反発性や子別れの研究をベースとして，食育への社会的関心の高まり，およびその裏返しとしての子どもの食の乱れなどを背景に企画されたものである。とくに，代表者は過去２回にわたって離乳の時代的推移の解明をめざした全国調査を継続してきており，その第３次調査を行う時期にさしかかっていたこと，また本研究の分担者達と「食発達研究会」を立ち上げ活動を行っていたことなどが本研究の直接の引き金となっている。

２．研究の目的

子どもの食は，それを用意し提供する親や保育士などの養育者と子どもとの社会的相互作用の場面であり，また動物としての子どもの積極性･能動性の発露の場面である。そこでは養育者と子どもの主体性がぶつかり合う契機をはらんであり，葛藤の舞台ともなる。本研究はそういった，大人が子どもの未熟な食を正しい方向に導くという食育の思想とは異なる姿を多面的に追究するために計画され実施された。

３．研究の方法

本研究の方法は多岐にわたるが，概ね以下のとおり要約できる。

（１） 質問紙調査

① 離乳の全国調査：全国の保健センターをサンプリングし，３歳児健診の場で母親に質問紙を配付して，自身がとった哺乳･離乳の実践法やそこで生じた問題，子どもの食や健康の実態などの回答を求め，返信用封筒で回収した。そして分析結果を過去に行った全国調査と比較した。

② 哺乳･離乳の世代間比較調査：関東と沖縄において，現在乳幼児を育児中の母親とその祖母に対し，同一内容の質問紙を配付し，その回答を比較した。

③ 離乳等の世代差や世代間伝達：沖縄において母親世代と祖母世代にインタビュー調査を行った。

④ 保育園に通う幼児を対象としたインタビュー調査，保護者に対する質問紙調査を実施した。

⑤ インターネット調査：就学前の子どもを持つ２５歳から４５歳までの母親約3000人を対象に，インターネットを用いて，家庭での食の意識と，授乳スタイルと後の食の乱れの対応などについて質問し，回答を得た。

⑥ 保育園と家庭における質問紙調査：子どもを保育園に通わせる家庭において，保育園での食にかかわる活動の実態と家庭での食行動との関連などについて保護者に質問した。

（２） 観察調査

① 哺乳の行動観察:新生児期から離乳開始までにわたって，哺乳時の母子を追跡観察し，哺乳に関する母子の駆け引きの様態を分析した。

② 離乳食の行動観察：離乳開始から１年間にわたり，離乳食を巡る親子のやり取りが家庭で継続的にビデオ観察された。

③ 保育園と家庭の比較：保育園児の食行動を 11 か月～２８か月齢まで家庭と保育園で観察し比較した。

（３） その他

① 育児雑誌の分析:子どもの食に関する過去３０年にわたる育児雑誌の記事の内容を分析し，その記載の変遷を調べた。

② 哺乳･離乳に関する母親・祖母へのインタビュー調査：母親と祖母の二世代に対して，哺乳･離乳の選択･実施にかかわる規定要因や母親･祖母間の伝承あるいは衝突について面接調査した。

４．研究成果

（１） 質問紙調査

① 子ども達における離乳・食発達・健康の実態を知るために、全国の保健センターによる３歳児健診の場で離乳調査への協力を５４９９名に依頼し、同意を得た母親から６７５名の回答を得た（回収率１２．３％）。これは過去の調査資料と対照させて母親の離乳行動がいかに時代の影響を受けるものかを明らかにするものであり、実際に急速に離乳が後継している実態が明らかにされた。

② また主として固形食以降の子どもの食行動，拒否，それに対する母親の感情、さらに子の健康状態・食習慣・母親の食意識・療育態度等の把握のためのデータ入力と一部解析を行った。離乳の全国調査結果を集計し，過去の全国調査の結果と比較した。母乳期間の長期化やそれに対する保健センターの指導の影響などが明らかになった。

③ 一方，退院直前に子どもと同室した母親が長期継続群に多く，また子どもが最初に口にするものを母親でなく医療スタッフが決めた場合が早期終了群に多いなど，出産時の病院での体験は，母乳終了の早遅と有意に相関していた。離乳は親子間の生物学的な葛藤であるが，それは社会的にも枠づけられていた。

④ 乳幼児の母親と乳幼児の孫がいる祖母を対象とした質問紙調査を実施した。その結果，子どもの食に関する技能の伝達は，家族・親戚経由から専門家・メディア経由へと変化していること，専門家志向の高い母親は授乳・離乳の進め方について柔軟性が低いこと，一方沖縄離島では，祖母と母親のリンクが強い群と本土出身の相対的に断絶度の強い群が併存していることが示された。

⑤ 就学前乳幼児を養育中の母を対象に行ったインターネット調査の結果について分析を行った。1309名からの自由記述文を，「対象」「内容」「特徴」別に計 31 項目から内容分析をおこなった。インターネット調査において要求授乳に関する因果モデルを構築し，子どもの偏食傾向，食

への集中力のなさ，食への消極性は，母親の偏食傾向と強く関連し，偏食の母親は家族に対して偏った食環境を提供していることが明らかとなった。母親の授乳スタイルは出産前の食生活から家庭において提供する食環境を予測する上でも重要な行動であることが示唆された。

⑥ 「携帯電話の通信機能を活用した食行動測定システム」を活用し，親の食意識調査と平行して親（ならびに家庭）の食行動,食卓状況の測定を試み,子の食嗜好,食行動の決定因としての，母の役割の重要性を指摘する結果が得られた。さらに,子と母の食の両者に影響を与える食環境について，フードシステムの発展・現状を分析した。

⑦ 保育園に通う幼児を対象としたインタビュー調査，保護者に対する質問紙調査を実施した。個人差はあるものの，幼児は保育園で経験した食に関わる活動（作物栽培活動や給食，おやつ）を，他の活動（遊びなど）より頻繁に家の人に話すこと,子どもがよく話をする家庭の親ほど,保育園の食経験を好意的にとらえていることなどが明らかになった。

（２）観察

① 新生児期から生後 6 ヶ月までの乳児 2 名の授乳時の母子の相互作用を観察した結果，母子の間に葛藤が生じるのは，1，2 ヶ月の乳児では眠りながら飲むことが多くその状況において母親は授乳をやめようとするとき，3 ヶ月以降は，乳児が遊びのみをしたり指しゃぶりをしたりするときに母親が飲ませようとするときであり,いずれの時期においても母子それぞれの駆け引きを行いながら調整されていくことが示された。

② また離乳食開始から 1 年間，計 15～16 回の観察を母子 3 組について行い,離乳食を食べる－食べさせるというやりとりが,母子の間でいかに組織化されていくかを分析した。食供給行動は７か月前後で大きな変化点を迎えることがわかり,母子相互作用上の節目と考えられた。

③ 子どもは保育園よりも家庭で食事場面での拒否行動が多く,また保育園の食では食事の前半よりも後半に拒否が多かった。保育士はその拒否に対して子どもの食の意思確認をするなど,子どもの主体性をベースにしていた。

（３）育児雑誌の分析：1970 年代～2000 年代に発行された育児雑誌２誌を分析したところ，育児雑誌は専門的知識の伝達・指導型から，悩み共有・励まし型へと変化していることが示された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計３７件）

① 根ヶ山光一、河原紀子、福川須美、星順子，家庭と保育園における乳幼児の行動比較：泣きを手がかりに，こども環境学研究，査読有，4,2008,41-47

② 外山紀子，作物栽培の実践と植物に関する幼児の生物学的理解,教育心理学研究,査読有，57，2009，491-502

③ 外山紀子・小舘亮之・菊地京子，母親における育児サポートとしてのインターネット利用，人間工学，査読有，46，2010，53-60

④ 河原紀子，保育園における乳幼児の食行動の発達と自律,乳幼児医学･心理学研究,査読有，18，2009，117-127

⑤ Negayama, K., Kawai, M., Yamamoto, H., Tomiwa, K., Sakakihara, Y., Behavioral development of infant holding and its laterality in relation to mothers' handedness and child-care attitude, Infant Behavior and Development, 査読有，2010，33,68-78

⑥ 今田純雄，感情と食行動-Macht の食感情モデル(five-way model)-，感情心理学研究，査読有，17,2009,120-128

⑦ 根ヶ山光一，河原紀子，保育園における寝かしつけ行動の日英比較,乳幼児医学･心理学研究，査読有，19，2010,117-123

⑧ 長谷川智子，今田純雄，川端一光，坂井信之，大学生の食態度・食行動についての基礎的研究－食の優先順位，経済的要因の視点から－，大正大学大学院研究論集,査読無，34,2010,1-21

⑨ 今田純雄，食行動と生活習慣病－過食性肥満に焦点をあてて-,行動科学,査読有，2011,50,19-31

⑩ 今田純雄，長谷川智子，武見ゆかり，田崎慎治，Survey Monkey を用いた「食事バランスガイド」教育プログラム作成の試み，広島修大論集，査読無，2012,52,21-24

⑪ Negayama, K., Norimatsu, H., Barratt, M., & Bouville, J.-F., Japan-France-US comparison of infant weaning from mother's viewpoint, Journal of Reproductive & Infant Psychology, 査読有，30，77-91

⑫ Negayama, K., Kowakare: a new perspective on the development of mother-offspring relationship, Integrative Psychological and Behavioral Science, 査読有，45，86-99

⑬ 根ヶ山光一，母乳から固形物へ：母子関係と味覚，小児歯科臨床，査読無，

17,26-31

〔学会発表〕（計３５件）

① 河原紀子,根ヶ山光一,広瀬美和・Niki Powers，乳幼児と保育者の相互作用の日英比較：食事場面に注目して，日本発達心理学会，2009 年 3 月，日本女子大学

② 田中敬子,岸本三香子,山下¥義昭,幼児の咀嚼力に関与する因子の分析,日本栄養改善学会，2008 年 11 月 5 日，鎌倉女子大学

③ 外山紀子，「子どもの食」に関する知恵と技能の継承,日本発達心理学会第 21 回大会，2010 年 3 月 26 日，神戸国際会議場

④ 根ヶ山光一,河原紀子，哺乳・離乳スタイルの世代間伝達-関東圏と沖縄離島圏の比較-，日本発達心理学会第 21 回大会，2010 年 3 月 26 日，神戸国際会議場

⑤ 今田純雄，長谷川智子，田崎慎治，乳幼児を育てる母からみた家庭の食，日本発達心理学会第 21 回大会，2010 年 3 月 26 日，神戸国際会議場

⑥ 長谷川智子，川端一光，今田純雄，母親の育児ストレスに影響を与える食行動要因についての因果的検討，日本発達心理学会第 21 回大会，2010 年 3 月 26 日，神戸国際会議場

⑦ 長谷川智子，今田純雄，武見ゆかり，田崎慎治，日常の食行動に関する健康心理学的・食生態学的検討（1）：大学生と中学生の食物摂取と食物選択との関連について，日本健康心理学会第 22 回大会，2009 年 9 月，早稲田大学

⑧ 今田純雄，長谷川智子，武見ゆかり，田崎慎治，日常の食行動に関する健康心理学的・食生態学的検討（2）：携帯電話の通信機能を活用した食行動測定の試み，日本健康心理学会第 22 回大会，2009 年 9 月，早稲田大学

⑨ 根ケ山光一，河原紀子，哺乳・離乳・食発達と育児観に関する全国調査，日本発達心理学会第 22 回大会，2011 年 3 月 26 日,東京学芸大学

⑩ 外山紀子，食の生涯発達と心理学，日本心理学会第 74 回大会,2010 年 9 月 20 日，大阪大学

⑪ 外山紀子，1 歳児と母親の相互調整に基づく摂食スキルの習得，人工知能学会 2011 年度全国大会，2011 年 6 月 3 日，岩手県民情報交流センター

⑫ 長谷川智子，乳幼児の食行動の発達に関する縦断的研究，日本発達心理学会第 22 回大会，2011 年 3 月 25 日，東京学芸大学

⑬ 長谷川智子，乳幼児の食行動に関する縦断的研究（２）授乳時における母子相互作用の検討．第 23 回日本発達心理学会，2012 年 3 月 9 日，名古屋国際会議場

⑭ 長谷川智子，今田純雄，田崎慎治，幼児と母親の食行動に関する研究（１）幼児の食行動の問題に影響を与える母子の要因の検討．第 75 回日本心理学会，2011 年 9 月 16 日，日本大学

⑮ 長谷川智子，今田純雄，山中祥子，田崎慎治，幼児と母親の食行動に関する研究（２）母親の日常的な食事についての基礎的分析．第 24 回日本健康心理学会，2011 年 9 月 12 日，早稲田大学

⑯ 外山紀子，離乳食場面における母子の意図の読み取り過程,人工知能学会 2012 年度全国大会，2012 年 6 月 14 日，山口県教育会

⑰ 根ヶ山光一・則松宏子・M. Barratt・J.-F. Bouville，日・仏・米における離乳の国際比較,日本発達心理学会第２３回大会，2012 年 3 月 10 日，名古屋国際会議場

〔図書〕（計１３件）

① 河原紀子，萌文書林，石黒広昭（編著）保育心理学の基底，2008，285 頁

② 根ヶ山光一，新曜社，子育て支援に活きる心理学：実践のための基礎知識，207 頁（１４１-１５１）

③ 根ヶ山光一，有斐閣，ヒトの子育ての進化と文化：アロマザリングの役割を考える，2010，303 頁

④ 外山紀子，食の検定：食農 1 級公式テキストブック，2011，250 頁

⑤ 根ヶ山光一，外山紀子，河原紀子，子どもと食:食育を超えて,東京大学出版会，印刷中

⑥ 水野清子・南里清一郎・長谷川智子他編著，子どもの食と栄養，診断と治療社，2012，総 235 頁

⑦ 根ヶ山光一,発達行動学からみた子別れ，平凡社，2012,56-82

⑧ 根ヶ山光一，アロマザリングの島の子どもたち，新曜社，近刊

６．研究組織

(1)研究代表者

根ヶ山　光一（NEGAYAMA KOICHI）

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：00112003

(2)研究分担者

河原　紀子（KAWAHARA NORIKO）

共立女子大学・家政学部・准教授

研究者番号：90367087

(3) 研究分担者

外山　紀子（TOYAMA NORIKO）

津田塾大学・学芸学部・教授

研究者番号：80328038
(4) 研究分担者
今田　純雄（IMADA SUMIO）
広島修道大学・人文学部・教授
研究者番号：90193672
(5) 研究分担者
長谷川　智子（HASEGAWA TOMOKO）
大正大学・人間学部・教授
研究者番号：40277786
(6) 研究分担者
田中　敬子（TANAKA YOSHIKO）
滋賀県立大学・人間文化学部・教授
研究者番号：10249500
(H21→H22：連携研究者)